

# グリーンコープ生協くまもとの取り組みが 「持続可能な社会づくり」として 熊本日日新聞に連載されました

～掲載している記事は、(株)熊本日日新聞社より提供いただきました～

「SDGsについて熊本の皆さんにお伝えするとなつた時に、まず思い浮かんだのがグリーンコープさんだったんです」と電話を受けたのが、熊本日日新聞社の木村彰宏さんとの出会いでした。

木村さんはグリーンコープ生協くまもとの組合員。産直びん牛乳や4R運動、グリーン市民電力の発電所づくり、熊本地震支援活動などグリーンコープの運動そのものが「SDGs」の掲げる「持続可能な社会づくり」を体現しているため、「ぜひ取材を」と希望されました。

木村さんは熊本県内だけでなく、福岡の産直びん牛乳工場や神在太陽光発電所まで熱心に取材をされ、取材内容を書き留めたノートは3冊ほどにも。「命のために」「人間と自然の共生」とグリーンコープの想いや運動の本質を突く記事に感動しました。

生命に寄り添い、みどりの地球をみどりのままに未来の子どもたちへの想いの下に続いてきたグリーンコープ運動を、木村さんのおかげで「SDGs」の視点から再認識することができました。この記事を通じてさらにグリーンコープ運動をすすめていきます。

グリーンコープ生協くまもと  
理事長 高濱千夏

自信をもって  
グリーンコープ運動を  
すすめていきましょーう！

# 共生の時代

みどりの地球を  
みどりのままで

臨時号

■発行：一般社団法人  
グリーンコープ共同体理事会  
■編集：共生の時代・編集部  
■〒812-8561  
福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号  
博多大博通ビルディング3階  
TEL092(481)7923  
FAX092(481)7876  
<http://www.greencoop.or.jp/>

## エスディージーズ 熊本日日新聞「SDGs 持続可能な未来へ」

### 熊本発SDGs chapter2

## 安心・安全求め 生協の実践

- \* 「SDGs」とは
- \* 1. 牛乳の開発・・・飼料、瓶詰め 命のために
- \* 2. 復活のハンバーグ・・・規格外野菜“絆”が生かす
- \* 3. 遺伝子組み換え作物・・・独自に調査 対策求める
- \* 4. 市民発電・・・「脱原発」の思い 自ら賄う
- \* 5. 自然エネルギー・・・地域浮揚へ 資源生かす
- \* 6. 被災地支援・・・「生活インフラ」の強み発揮
- \* 7. 孤立を防ぐ・・・見守り続け「取り残さない」
- \* 8. 多重債務・・・相談と貸し付け 生活再生へ
- \* 9. 古着の再利用・・・スラムの学校運営支援
- \* 10. 水俣病展を主催・・・人間と自然 共生支えたい



### 熊本発 SDGs CHAPTER 2

## 安心・安全求め

### 生協の実践

連載 あすスタート

連載「熊本発SDGs エスディージーズ 持続可能な未来へ」第2章は、「グリーンコープ生協くまもと」（本部・熊本市）が展開する「安心・安全」な食品開発、太陽光発電や小水力発電など原発に頼らない電力供給などに注目。消費者の視点から持続可能な社会づくりについて考えます。





## SDGsとは？

2000年9月より安全で豊かな世界づくりへの協力を約束する「国連ミレニアム宣言」

この宣言と、1990年代の国際会議などでの目標を反映したものが「ミレニアム開発目標(MDGs)」。2015年までに達成する「貧困・飢餓」「環境」など8目標を設定。成果を挙げたが「乳幼児や妊産婦の死亡率削減」など未達成も。環境汚染や気候変動、自然災害などに対応する新たな指標が求められた。

12年6月 国連持続可能な開発会議(リオ+20)

15年9月 国連サミットで、16年から30年までに取り組む「持続可能な開発のための2030アジェンダ われわれの世界を変革する」を加盟193カ国の全会一致で採択

中核となる分野別目標が「SDGs」。途上国の課題が中心だったMDGsに対し、先進国も共に取り組む普遍的な目標となった。

16年5月 日本政府がSDGs推進本部設置

貧困やジェンダー、エネルギー、気候変動、海洋資源などでの達成度が低いとされる日本。政府は「あらゆる人々の活躍の推進」「健康・長寿の達成」「生物多様性、森林、海洋等の環境の保全」などを優先8分野に。

18年6月 SDGs未来都市に小国町など29自治体

19年7月 熊本市など31自治体を追加選定

## 17の目標「誰一人取り残さない」

持続可能な開発目標 (SDGs=Sustainable Development Goals)は2015年、国連が採択した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に基づいている。

2030アジェンダ(行動計画)は、貧困や飢餓といった主に途上国が抱える課題に加え、環境や気候変動など先進国も含めた地球全体の問題に注目。副題に「われわれの世界を変革する」と掲げる。基本理念は「誰一人取り残さない」だ。2030年までの達成を目指す。

重視するのは、世界の持続に欠かせない▽人間▽地球▽豊かさ▽平和▽パートナーシップの「五つのP」。「人間」の項では「貧困と飢餓に終止符を打ち、全ての人々が尊厳と平等、健康な環境の下で潜在能力を発揮できるようにする」との決意を示している。

このアジェンダを、具体的な「17の目標」と「169のターゲット」に落とし込んだのが「SDGs」だ。

「17の目標」は経済、社会、環境と密接に絡み、この3点の調和を重視。環境保全は企業経営を圧迫しかねないといった従来の対立構図から脱却し、それぞれのバランスに重きを置くという新しい視点に立っている。

広範な「17の目標」だが、①～⑥は貧困や健康、水など人間の生存に欠かせない基本的な目標で、SDGsの前身「MDGs(ミレニアム開発目標)」を引き継ぐ。⑦～⑩は先進国にも絡む諸課題や経済問題、⑪～⑮は環境が軸だ。⑯や⑰は目標達成に欠かせない基礎的な要件を掲げる。

各目標に連なる計169項目の「ターゲット」は「いつまでに、何を、誰が、どう取り組むか」を提示。例えば、①「貧困をなくそう」では「2030年までに極度の貧困(1日1.25ドル未満での生活)を世界のあらゆる場所で終わらせる」など七つのターゲットを設けている。

### 2030アジェンダが掲げる重要分野 五つのP

People ... 人間

Planet ... 地球

Prosperity ... 豊かさ

Peace ... 平和

Partnership ... パートナーシップ

### 新連載 第1章は「人生100年、復興の先に」

SDGsを座標軸にさまざまな現場の課題と将来像を探る新連載「熊本発SDGs 持続可能な未来へ」を始めます。第1章は、熊本地震で被災した益城町安永地区が挑む「人生100年時代」の復興。超高齢社会ニッポンに共通する課題とも向き合い、コミュニティの再構築を目指す人々の歩みを見つめます。

続く各章は、安全安心を追求する生協活動や、新たな成長の可能性を探る地場企業の動向に注目。環境保全や貧困問題も掘り下げ、県内外の実践例などを伝えます。担当は編集委員室の木村彰宏と小多崇です。



## 消費者の思い 応えたい

酪農家の朝は早い。午前5時半。菊池市下河原の開倫太郎さん(46)の牛舎で乳搾りが始まった。「よし、よし。さあおいで」。開さんと妻美紀さん(38)の声掛けに、搾乳場所に進む牛が列を成す。グリーンコープ生協くまもと(高濱千夏理事長、熊本市)をはじめ、九州を中心とした14生協でつくるグリーンコープ連合の契約農家だ。遺伝子組み換え作物(GMO)を含まない飼料で乳牛約40頭を育てている。「私も子どもに安心して食べるものを食べさせたい。安全な牛乳を飲みたい人たちの思いに応えたい」と開さん。

1996年に米国で生産が始まったGMOは、除草剤などに耐性を持つ。健康への影響を懸念する生協組合員の声を受け、グリーンコープはGMOを使わない牛乳生産を模索。98年、JA菊池の協力で実現した。安全性が確認された飼料に加え、自汗して育てた牧草やトウモロコシも牛に与えている。「仕事は増えたがやりがいがある」と言う。

### 熊本発 SDGs CHAPTER 2

## 安心・安全 求め 生協の実践

1

乳牛の乳頭に搾乳器を当てる酪農家の開倫太郎さん  
8月20日、菊池市

3面に続く

「安心・安全な暮らし」を追求するグリーンコープ生協くまもとの活動を通して、消費者の視点から持続可能な社会づくりを考える。(編集委員 木村彰宏)

搾乳時に牛の乳頭を拭くタオルは組合員からの贈り物。組合員の子どもの宿泊体験も受け入れ、交流を深める開さんは手応えを感じている。「牛乳を飲む人の声が届きます」

# 飼料、瓶詰め 命のために



雪印メグミルク福岡工場に設置されているグリーンコープの原乳を入れる四つのタンク＝福岡市南区

## 牛乳開発

戦後の高度経済成長期以降、添加物を使った加工食品の大量生産・消費が当たり前になった日本社会。一方、食の安全性に不安を抱く消費者らが結集したのが生活協同組合だ。出資した消費者が

「毎日飲む牛乳を良質で安全なものにしよう」と、酪農家やメーカーと一緒に作って来ました。グリーンコープ生協くまもとの組合員、篠原晴美さん(71)＝益城町＝は胸を張る。1980年代から商品委員として、消費者の立場から牛乳の開発に関わった。「私たち組合員の声は原点です」

1面から続く

組合員となって運営に携わる。グリーンコープ生協くまもとの組合員は県内6万4千人。他の13生協と構成するグリーンコープ連合では総計42万人に上る。

食づくりの理念に共鳴した」と工場長の山本修さん(54)は振り返る。「こだわりは「おいしさ」にも。全国に先駆けて1984年、低温殺菌のパスタライズ牛乳を導入。一般的な高温殺菌に比べ、タンパク質やカルシウムなど成分の変成が少なく生乳に近い。篠原さんは「これも『牛乳を沸騰させてはいけないのなせ』という組合員の素朴な疑問から始まった」と言う。

「会社が2000年に起こした集団食中毒で信用を失い、原点に立ち返ろうとしていた時期。グリーンコープの命を育む」

「牛乳も、どの商品も『命を大切に』との思いが詰まっている。次世代を担う子どもたちが大人になっても安心して暮らせる社会にしたい」。篠原さんは食の安心・安全に未来を重ねる。

### CHAPTER 2

## 安心・安全 求め 生協の実践

1

「牛乳も、どの商品も『命を大切に』との思いが詰まっている。次世代を担う子どもたちが大人になっても安心して暮らせる社会にしたい」。篠原さんは食の安心・安全に未来を重ねる。

(木村彰宏)



◇食の安全を重視したグリーンコープの牛乳開発。国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」の「17の目標」に照らすと、遺伝子組み換え作物の排除は③「すべての人に健康と福祉を」に重なる。メーカーの協力態勢だ。





遺伝子組み換え菜種を採取した県道臨港線沿いの植え込みを指さす岩尾あかねさん(八代市)



### CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



特定の除草剤が効かない遺伝子操作した菜種は、輸送中にこぼれた種が発芽したとみられる。国の調べで04年、茨城県の輸入港付近で発見されたのを機に翌05年から全国の生協が調査に着手。熊本県内に組み換え菜種の輸入港はないが、

「半分びっくり、半分やっぱり。周囲の菜種は花が終わっていたのに、この株だけ咲いていて、何か違うと思ったからです」

2019・10・3

八代市の八代港と九州自動車道八代インターを結ぶ県道臨港線。コンテナを積んだトレーラーが行き交う。グリーンコープ生協くまもとの組合員で八代西地区委員長、岩尾あかねさん(41)は3月、地元の

八代市であった遺伝子組み換え菜種の現地調査に参加した。臨港線の植え込みを生えた葉を調べると、遺伝子を組み換えた菜種だと判明した。

07年に八代港近くで確認されたのを皮切りに、15年間に延べ19カ所で見つかった。グリーンコープ本部組合員事務局の國本聡子さんは「別の港で菜種を積んだ車の洗浄が不十分で、あちこちに種を落とすのではないか」とみる。

食の安全に新たな不安も広がっている。遺伝子も効率的に改変できるゲノム編集技術で改良した農水産物の国内販売が年内にも始まるが、国は9月、編集食品の表示を義務付けない方針を発表。グリーンコープは、表示の義務付けと規制を求める署名活動を進めている。

2019・10・3

### 遺伝子組み換え作物

## 独自に調査対策求める



ナカドモファームで、グリーンコープ生協くまもとの組合員にレンコン加工などについて説明する社長の中塘万格人さん(右端)と山本堅さん(右から3人目) = 8月28日、宇城市松橋町

### CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



「どつやって市場に出荷できるか毎日考えた」とグループ代表の中塘万格人さん(57)。被災したメンバーでハンバークを担当していた山本さんと支えられて18年4月、ナカドモファームが発足。中塘さんが社長、山本さんが常務に就き、レンコンをみじん切りやペーストにする設備を整えた。今回からハンバークの加工を担う食肉卸売業「矢野畜産」(熊本市中

2019・10・2



グリーンコープ生協くまもとの組合員にレンコン加工などについて説明する社長の中塘万格人さん(右端)と山本堅さん(右から3人目) = 8月28日、宇城市松橋町

協組合員約1500人を前に声を詰まらせた。「熊本地震から3年半、やっぱり生ハンバーク」販売の決起集会。宇城市松橋町のレンコン生産加工会社「ナカドモファーム」の山本堅さん(62)は、生

「どつやって市場に出荷できるか毎日考えた」とグループ代表の中塘万格人さん(57)。被災したメンバーでハンバークを担当していた山本さんと支えられて18年4月、ナカドモファームが発足。中塘さんが社長、山本さんが常務に就き、レンコンをみじん切りやペーストにする設備を整えた。今回からハンバークの加工を担う食肉卸売業「矢野畜産」(熊本市中

交流も重ねてきた。「生産者を応援したい」という組合員の励ましに支えられて18年4月、ナカドモファームが発足。中塘さんが社長、山本さんが常務に就き、レンコンをみじん切りやペーストにする設備を整えた。今回からハンバークの加工を担う食肉卸売業「矢野畜産」(熊本市中

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生産者、メーカーの連携は、「パートナーシップで目標を達成しよう」と掲げるSDGs(持続可能な開発目標)に通じる実践だ。(木村彰宏)

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生産者、メーカーの連携は、「パートナーシップで目標を達成しよう」と掲げるSDGs(持続可能な開発目標)に通じる実践だ。(木村彰宏)

2019・10・2

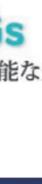


### 復活のハンバーク

## 規格外野菜 “絆” が生かす

復活を望む声だった。

2019・10・2



熊本発SDGs 持続可能な未来へ



熊本発SDGs 持続可能な未来へ



太陽光発電パネル4228枚が並ぶ神在太陽光発電所＝福岡県糸島市

市民発電

「脱原発」の思い 自ら賄う

福岡県糸島市の田園地帯。集落に程近い林を抜ける坂道を上ると視界が開け、丘陵約2秒に4228枚もの発電パネルが並ぶ。2013年に発電を始めた神在太陽光発電所だ。

まもとなど、九州を中心とした14生協によるグリーンコープ連合が設立したグリーン・市民電力が建設。出力1057キロワットで、メガソーラーと呼ばれる千キロワットの規模を誇る。

「脱原発を求める組合員の思いの結晶です」。12年の市民電力設立時から今年6月まで専務理事を務めた大橋年徳さん(61)は感慨深げだ。

「原発反対の取り組みは、旧ソ連・ウクライナで1986年に起きたチェルノブイリ原発事故にさかのぼる。爆発後の消火などに当たった数十人が急性放射線障害で死亡。放射性物質の汚染で約33万人が移住し、がんなどによる死者が推定4千～9千人に達した衝撃的な事故だった。当時、グリーンコープ

は「原発と人類(生命)は共存できない。みどりの地球をみどりのままに子どもたちに手渡さう」と申し合わせた。事故の悲惨さを伝える映画上映や写真展を熊本市などで開催。食品の放射能汚染調査にも乗り出した。

「新たな取り組みの出發点は、神在発電所だった。併設した自然エネルギーの研修施設には年間500人ほどが訪れる。九州電力玄海原発まで直線で30キロ。運営担当の小川智恵子さん(71)は「組合員に限らず、原発に不安を感じて見学に来る人もい

る」と話す。市民電力は、グリーンコープ連合加盟の生協がある兵庫県や宮崎県でも直営のメガソーラーを建設。15年には菊池市で、民間の菊池自然電力に出資して熊本菊池太陽光発電所の稼働に参画した。

「一方、パートナーを組む生協の市民電力が重視したのは「原発フリー」の電力供給だった。チェルノブイリ原発や福島第1原発の事故が大きな教訓だ。太陽光を中心とした発電事業に加え、市民電力は16年に福岡、熊本両県で相次いで電力供給事業をスタート。同年4月に始まった、各家庭が電気の契約先を自由に選べる「電力小売りの全面自由化」がきっかけとなった。

「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



「脱原発を求める組合員の思いの結晶です」。12年の市民電力設立時から今年6月まで専務理事を務めた大橋年徳さん(61)は感慨深げだ。

「新たな取り組みの出發点は、神在発電所だった。併設した自然エネルギーの研修施設には年間500人ほどが訪れる。九州電力玄海原発まで直線で30キロ。運営担当の小川智恵子さん(71)は「組合員に限らず、原発に不安を感じて見学に来る人もい

る」と話す。市民電力は、グリーンコープ連合加盟の生協がある兵庫県や宮崎県でも直営のメガソーラーを建設。15年には菊池市で、民間の菊池自然電力に出資して熊本菊池太陽光発電所の稼働に参画した。

「一方、パートナーを組む生協の市民電力が重視したのは「原発フリー」の電力供給だった。チェルノブイリ原発や福島第1原発の事故が大きな教訓だ。太陽光を中心とした発電事業に加え、市民電力は16年に福岡、熊本両県で相次いで電力供給事業をスタート。同年4月に始まった、各家庭が電気の契約先を自由に選べる「電力小売りの全面自由化」がきっかけとなった。

「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」(木村彰宏)

熊本発SDGs 持続可能な未来へ



CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



「豊富な自然エネルギーを地域活性化に役立てたい」。2007年春まで小国町長を6期24年務めた宮崎暢俊さん(78)は現在、13年に設立した会社「ローカル・パワー」の社長を務めている。

11年の東京電力福島第1原発事故以来、各地に広がった太陽光発電所。「小国町でも大手が大規模発電所(メガソーラー)を次々に建設したが、地元で経済効果はなかった」。こんな問題意識で会社を設立。東京のNPO法人の仲介で出会ったのが、グリーンコープ生協くまもとなどがつくった「グリーン・市民電力」だった。

第1弾は17年、小国町下城で始めた馬洗瀬小水力発電所(22キロワット)。農業用水路を利用し、高低差約30メートルを流れる水の勢いで発電する。雑木林の斜面にあり、遠めには気付かないほど風景に溶け込んでいる。

「少しでも地元で経済的波及をもたらしたかった」と宮崎さん。小水力発電では、近くのコメ農家に水路の清掃や点検を委託。バイナリー発電の泉源所有者には管理費を払っている。「グリーンコープ組合員の見学もあり、地域間交流につながっている」と言う。

「家庭に供給している。当初はバックアップとして九州電力との契約も必要で、原発との間に一線を画すことは難しかったという。しかし、電力供給の制度見直しなどもあり、九電との契約も18年に解除。完全な「原発フリー」を実現した。

現在は、小国町の二つの発電所も供給元に組み込まれている。宮崎さんは言う。「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」(木村彰宏)

自然エネルギー

地域浮揚へ 資源生かす



杖立温泉街にある、2018年に設けた温泉熱バイナリー発電所で機器を操作する宮崎暢俊さん(右) 小国町



2019・10・5

2019・10・4

(木村彰宏)



「東無田食堂」で住民と談笑するグリーンコープ生協の理事の高濱千夏さん(左端の笑顔) 8月1日、益城町の小池島田仮設団地

被災地支援

「生活インフラ」の強み発揮

「ぎょうも楽しくおしゃべりしてくださいね」。グリーンコープ生協くまもと理事長の高濱千夏さん(39)が、食卓を囲む人たちに語り掛ける。

2016年4月の熊本地震で被災した益城町東無田地区にある小池島田仮設団地の集会所。住民でつくる復興委員会とグリーンコープが定期的に開いている食会「東無田食堂」の風景だ。

仮暮らしで簡単な食事になりがちな高齢者にとって、復興委が生協に協力を要請。18年6月から月2回、週末に開く食堂には毎回30人ほどが集う。既に自宅を再建した人も多く、住民同士の語らいの場になっている。

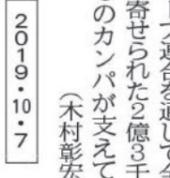
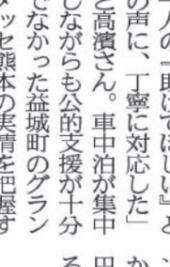
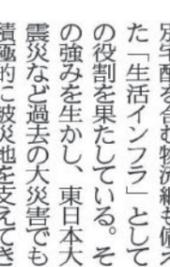
食材はグリーンコープが無償提供。参加する住民も担い手として生協スタッフと一緒に包丁を握る。一食200円で、集まったお金は地区に還元する。この日のメイン料理は「なすと豚肉のみそいため」。ニンニクやショウガの香りが食欲をそそる。

毎回参加する山田貞子さん(85)は「おいしくて、つても完食です。近くにいてもあまり会えないから、みんなの話を聞けるのがいいです」。欠かさず通う高濱さんも、住民とはすっきり顔なじみだ。自身も御船町の自宅で被災しながら、当初から支援活動を引き継ぎてきた。

全国の生協は日頃から食料や日用品を取り扱い、戸別宅配を含む物流網も備えた「生活インフラ」としての役割を果たしている。その強みを生かし、東日本大震災など過去の災害でも積極的に被災地を支えてきた。

熊本地震から3年半。粘り強い支援活動は、グリーンコープ連合を通じて全国から寄せられた2億3千万円ものカンパが支えている。(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



孤立を防ぐ 見守り続け「取り残さない」

「こんにちは」。グリーンコープ災害支援センターの津志田和義さん(70)が、ドア越しに呼び掛けるが返事はない。一戸建ての平屋が並ぶ益城町砥川地区の災害公営住宅(復興住宅)。

熊本地震の被災者が暮らし、繰り返す声を聞くと、津志田さん(85)がやっと姿を見せた。 津志田さんは自宅が全壊した。仮暮らしの後、自力で再建が困難な被災者向けの復興住宅に入ったのは今年2月。同居の長女が仕事に出ている日は「1人暮らし」だ。

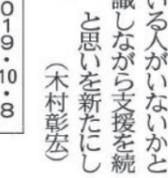
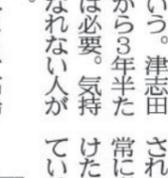
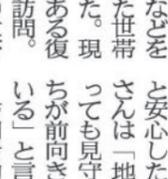
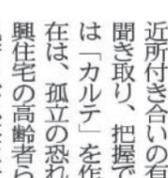
「お元気でしたか。こはんは食べていますか」。津志田さん(85)は「おいしくて、つても完食です。近くにいてもあまり会えないから、みんなの話を聞けるのがいいです」。欠かさず通う高濱さんも、住民とはすっきり顔なじみだ。自身も御船町の自宅で被災しながら、当初から支援活動を引き継ぎてきた。

市東区の物流センター内に設置。17年2月から「在宅被災者」の支援を担っている。修理が追いつかない自宅や、小屋やビニールハウスに住み続けた被災者は把握されず、支援が届かないケースが少なくなくなった。

益城町を中心に、津志田さんらスタッフが約千世帯を訪問。被災状況や健康、食事、買い物などの様子、近所付き合いの有無などを聞き取り、把握できた世帯は「カルテ」を作った。現在は、孤立の恐れがある復興住宅の高齢者らも訪問。見守りが必要な計約30世帯を、2カ月に1回のペースで訪ねている。

津志田さんの担当先の一人暮らしを続けた被災者(70)は地震後も自宅でも住み続け、被災者の孤立解消に力を入れている。 国連提唱のSDGs(持続可能な開発目標)は、「誰一人取り残さない」が基本理念。センター長の松井修一さん(60)は「取り残されている人がいないかと常に意識しながら支援を続けている」と言う。(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



津志田さん(左)と高濱千夏さんを交すグリーンコープ災害支援センターの津志田和義さん 8月23日、益城町の災害公営住宅「砥川団地」





パキスタンのアル・カイルアカデミーで授業を受ける学童のクラスの子どもたち(社会福祉法人グリーンコープ提供)

## CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

⑨



福岡県粕屋町にある3階建ての作業所兼倉庫。別した古着がそれぞれ山積みになり、フロアを埋めている。社会福祉法人グリーンコープの施設「ファイバー

リサイクルセンター」だ。熊本を含め、九州を中心としたグリーンコープ連合加盟の14生協の組合員から次々と古着が送られてくる。上着、シャツなどを72種類に分別。海外の古着市場に輸出している。事業開始は2010年。センター長の清水清子さん(62)は「この活動には三つの目的がある」と言う。一つが「国境を越えた子

育て支援」だ。日本の他国と環境で暮らす子どもたちを、パキスタンの都市カラチのスラム地区にある学校「アル・カイルアカデミー」の運営に役立てている。グリーンコープだけでもこれまでに出荷した衣類は480トンを超え、支援額は1500万円に上る。「ごみ処分場に数千人が住み、燃やしたごみの中から拾った銅や鉄などを売って

が、安定した暮らしを取り戻すきっかけになったと思ふと、うれい」と言う。16年の熊本地震後、被災者に限定した年1・5%の低利貸し付けも始めた。相談で目立つのは「仮設住宅から災害公営住宅に移ると家がなくなると、支払い続けたら心配」といった先行きへの不安だという。9月までの約3年半で震災関連の相談は820件、貸し付けは75件に上る。一番苦しい時に寄り添い、「安心・安全な暮らし」を支えている。

2019・10・11



熊本発SDGs 持続可能な未来へ



グリーンコープ生協くまもとの生活再生相談室で相談への対応を話し合う室長の村上浩勝さん(左)と室長補佐の中島明美さん(熊本市中南区)

## CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

⑧



「仕事がなくし子どもの学費が払えない」「家賃を滞納して退去するよう言われた」

熊本市中央区のビル2階にあるグリーンコープ生協くまもとと生活再生相談室

「仕事がなくし子どもの学費が払えない」「家賃を滞納して退去するよう言われた」相談は無料。生活資金が必要と判断した場合、150万円を上限に年9・5%の利息で貸し付けている。従来の生協活動の枠を超えた取り組みだ。多重債務を巡っては2005年ごろから、返済能力を無視した過剰融資が社会問題化。翌06年には230

万人もの多重債務者の存在が明らかになった。金利上限を見直す改正貸金業法が成立した同年、グリーンコープ生協くまもくと当時のグリーンコープ生協九州の生協で初めて、多重債務者支援の相談と貸し付け業務をスタート。08年4月には熊本でも動き出した。

「突然の入院や失業、給料未払いなどがきっかけで、普通に暮らしてきた人から受託した多重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。「貸し付けありきでなく、生活の見直しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

が多重債務者になってしまふ。そうした人たちを支える仕組みが必要だ」と。当時のグリーンコープ生協くまもと理事長で、相談室開設と同時にスタッフとなった室長補佐の中島明美さん(63)は導入理由を説明する。

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には現在までの面談は720件、貸し付けた8000件の総額は4億2千万円に達する。県からの委託費を運営に充てる一方、貸付金の原資を賄うのは組合員の出資金だ。貸し倒れは1件のみ。中島さんは「貸し付け

が、安定した暮らしを取り戻すきっかけになったと思ふと、うれい」と言う。16年の熊本地震後、被災者に限定した年1・5%の低利貸し付けも始めた。相談で目立つのは「仮設住宅から災害公営住宅に移ると家がなくなると、支払い続けたら心配」といった先行きへの不安だという。9月までの約3年半で震災関連の相談は820件、貸し付けは75件に上る。一番苦しい時に寄り添い、「安心・安全な暮らし」を支えている。

2019・10・9 (木村彰宏)



熊本発SDGs 持続可能な未来へ

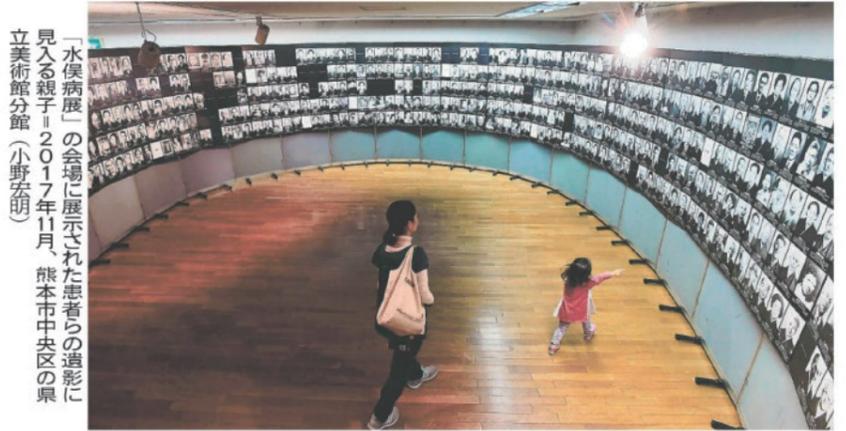


# 多重債務者 相談と貸し付け 生活再生へ

## 古着の再利用 スラムの学校運営支援



熊本発SDGs 持続可能な未来へ



「水俣病展」の会場に展示された患者らの遺影に見入る親子。2017年11月、熊本市中央区の県立美術館分館（小野安明）

### 水俣病展を主催

## 人間と自然 共生支えたい

「食べ物を扱う私たちにまもと理事長の高濱千夏さんと、水俣病は原点です。2017年11月16日、熊本市中央区の県立美術館分館で始まった水俣病展の開会式。主催者として臨んだグリーンコープ生協く

親として子どもたちに安全なものを食べさせたいの思いで、生協活動に参加してきました」

その「食の安全」を大きく脅かしたのが水俣病だ。水俣市のチソ工場が八代海に排出した有機水銀が蓄積された魚介類を食べ発症。母親の胎盤を通じて被害を受けた胎児性患者もいた。

「魚を食べて、まさか自分

### CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践



分やおなかの子どもが水俣病になるとは誰も思わなかったでしょう。高濱さん、巡回展の主催を引き受けたのは、生協活動を再認識する機会にしようと考えたからだ。組合員は展示資料の説明、シンポジウムや講演会のアナウンスを担当。わが子が通う学校にそれぞれ出し、ポスター掲示を依頼するなど奔走した。

助成先の選定は芦北町の漁師、緒方正人さん(65)も携わっている。「水俣病は食べることが始まった事件。食べ物は生命の根幹にかかわるもの」と語る緒方さん。安心・安全な暮らしを追い求め

2019・10・14

## 「SDGs」に到達していきました！

一般社団法人グリーンコープ共同体 代表理事 熊野千恵美

「SDGs」という言葉を耳にしたのは、実はつい最近のことです。「持続可能な開発目標」の略称で、国際社会共通の17の目標があるそうです。驚いたことに、その一つひとつのどれもグリーンコープが取り組んでいることだということが気づかされたのです。

グリーンコープの商品は、単なる食欲を満たすためではなく、生産者とながらついたり、自然環境を守るものであったり、「南」の国の人々との連帯関係をつくるものであったりと、心も体も豊かに

してくるものばかりです。たとえば、無農薬バナナ。今から約30年前ネグロスの子どもたちが飢餓に苦しんでいたことに目をそらすことができずに、「生きてほしい！」と願った組合員の思いが作り出した「南と北の共生」の象徴的な民衆交易品です。そこからアジアの国々の人たちの暮らしへとつながり、連帯へと広がりました。

たとえば、「誰もが住んでいる地域で安心して暮らしていきたい」という願い。それが福祉の取り組みをおして、豊かな地域社会の再生へとつ

ながっています。また、安心・安全な食べものを得るには、世界が「平和」でなければなりません。平和を守りつくるために行動します。このような日常の積み重ねが「平和」なのではないでしょうか。

さらに、グリーンコープが一番大事している「生命(いのち)は、人々の日々の暮らしの中で育まれ守られる」と思っています。いのちに寄り添ってきたグリーンコープの歩みそのものが、「SDGs」への道につながっているように思います。顔と顔の見える

グリーンコープの食べものを選ぶこと、リユースびん容器を洗って返却すること、自然災害で被災した地域への支援に取り組むこと、原発フリーの電気を使うことなど、日々の暮らしの中のこうした行動をさりげなく実践し続けるグリーンコープ。「SDGs」を知って、よりグリーンコープの組合員であることに誇りを感じました。

みなさんも熊本日日新聞の記事に、ぜひ目を通してグリーンコープのすばらしさを感じてください。



### 熊本発SDGs

持続可能な未来へ

